

特260 31

455

咸陽宮
鳥追船
松山鏡
壇風
谷行

廿五



始



特 260
455

坂戸金剛拾
九代右近氏
但遺稿據二
拾三代右京
氏慧心鈔校

咸陽宮

梗概 (所) 唐土咸陽宮

(李) 十月

秦の始皇帝豫て燕の國の地圖と樊於期が首とを賞をかけて求めたり。されば燕國の志士荆軻と秦舞陽の二人は、此の好機を利用して始皇帝の首を討つべしとて



地圖を納めたる箱の底に劔を忍ばせて參内し、阿房殿にて始皇帝を見えたり。始皇帝喜びて箱を開かせしに、底に劔の影を見しかば、驚きて身を引かんとするを荆軻、秦舞陽兩の袖を引ききて離さず、劔を擬してこれを刺さんとせり。始皇帝乃ち吾に三千の美妃あり、中にて最愛の妃花陽夫人の琴の音を聞きたしと乞ふ。荆軻等これを許して待つ程に、夫人「君聞けや七尺の屏風は躍らは越えつべし」と秘曲をつくせば、荆軻等酔へるが如く聞入りければ、始皇帝を引千切つて遁れんとす。荆軻怒つて用意の劔を始皇帝にかけて投げつけしが、劔はいたづらに柱にとどまり、荆軻等は遂に八つ裂きにせられ、秦の御代はいよ／＼榮えけりとなり。



咸陽宮 (四五番目) (略能記)

役別	装束附
シテ始皇帝	直面唐冠 色鉢巻 着付厚板 半切 狩衣 腰帶 唐團扇 鉦
シテツレ花陽夫人	面小面 天冠 髪 髪帯 着付泊 唐織壺折 大口 腰帶 扇
シテツレ二人以上	ツレ 髪 髪帯 着付泊 唐織着流 側次 扇
ワキツレ 刺 軻	着付厚板 白大口 側次 腰帶 扇 小刀
ワキツレ 奏舞陽	ワキ同装
ワキツレ 大臣 三人	洞烏帽子 着付厚板 狩衣 白大口 腰帶 扇

作物 大屋基(鉦ツケル)

咸陽宮

ツレ 柶ウレ 咸陽宮と都の西より一万余乗 里二百余里 大臣 内裏の地より
ツレ 三里高く雲を凌ぎて築上たり
ツレ 長生殿あり不老門あり 大臣 積キの
ツレ 築地方四十里 ま

百餘丈大長 雲路を渡る層金も。
 雁イサデなくしてイサデ輕イサデ一イサデ 内ふ三十
大長 六宮あり 珠の砂イサデ瑠璃の砂イサデ。
 黄金の砂を地よりイサデ現イサデ 長生
 不老の日月をイサデこもイサデ曇イサデをイサデ双イサデとイサデ移イサデ一
大長 帝の御殿阿房宮イサデ 洞イサデの柱イサデ千イサデ

六丈大長 東西九町イサデ 南水イサデみ所イサデ
大長 六丈の幡イサデ錦イサデ電車イサデのイサデさイサデ井イサデ 水イサデ船イサデ
 からイサデ大イサデよイサデ翻イサデりイサデ 昇イサデれイサデばイサデ玉イサデのイサデ階イサデれイサデ。
 一イサデくイサデ金イサデ浪イサデをイサデ磨イサデきイサデてイサデ輝イサデけイサデり。
 唯イサデ日月イサデのイサデ影イサデをイサデ踏イサデみイサデ茶イサデ名イサデをイサデ渡イサデる
 地イサデとイサデ各イサデ肝イサデをイサデ消イサデとイサデやイサデ

五三

五三

二声上 思フひルまハのハいハのハあハをハはハ空ハ晴ハてハあハふ
二声上 重フなるハ月ハうハがハ山ハをハうハてハいハ
二声上 雲フのハ跡ハをハ埋ハてハ松ハをハうハてハいハ
二声上 月ハ鏡ハ人ハのハ愛ハをハ破ハるハ 縦ハ横ハ川ハがハ
二声上 高ハくハたハ思ハひハのハ末ハいハ右ハにハいハ川ハ
二声上 弥ハ獲ハのハ心ハをハいハまハきハてハきハ山ハのハ
二声上

二声上 雲フふハ日ハをハいハまハきハてハきハ山ハのハ
二声上 多ハ丸ハ咸ハ陽ハ宮ハふハ遠ハにハいハまハきハてハきハ山ハのハ
二声上 今ハふハ秦ハ蘇ハ陽ハ遠ハのハ烟ハれハがハいハらハふハ
二声上 荆ハ軻ハ秦ハ音ハ陽ハとハヤハスハ二ハ人ハのハ者ハ遠ハのハ
二声上 烟ハれハ指ハ指ハ若ハ若ハ子ハ樊ハ於ハ期ハがハ頭ハをハ持ハ
二声上 東ハ内ハ侍ハりハたハらハ由ハヤハルハ也ハ

二声上 此間係連ト
二声上 狂言ヤリフ有

^コ新^上て^長荆河へ佩^イ釵^ケを解^キて威儀^イを
 な^クす^チ其^チ會^ケの儀^イ式^シよ^ク後^ノ以^テと^シて^ス上^ル
 を^シら^ズふ^レは^ハ後^ノ一^ニス^テル^ル 舞^陽 金^ノ浪^ノ珠^ノ玉^ノの
 階^ノ階^ノを^シ踏^ミこ^シ二^ノ里^ノが^ノ間^ノを^シ登^リり^シけ^レむ
^コ為^シ氷^ヲを^シ踏^ミむ^シ地^ノを^シ踏^ミて^シ荆^ノ河^ノの^ノ流^ルふ
 の^ノ不^レき^カを^シ 舞^陽 跡^ノよ^クま^シる^ル 秦^ノ舞^陽

身^ノ体^ノを^シ折^リた^シま^シて^シお^シて^シの^ノ不^レき^カ
 兼^テて^シ体^ノを^シし^ラる^ル 一^ニあ^リぬ^カ
 な^リと^シよ^ク秦^ノ舞^陽 燕^ノの^ノ跡^ノよ^ク
 住^ノ居^ノよ^ク慣^レひ^テ玉^ノ殿^ノを^シ踏^ミ恐^レと^シふ
 聴^クて^シ上^リ兼^テる^ル 舞^陽 史^ノを^シふ
 さ^ノの^ノ鼻^ノを^シ強^シひ^テ史^ノを^シ破^レす^ル

御禮

卷

既以て玉衡を尙規のさるの躡就の
蠖^{ナラ}所^ヲと知らずて 實^{ウカ}理^カりとして
典獄^ニの^ハさ^ハも^ハ嚴^キく^ハ其^キ禁^キ中^ニに
轅^ヲ門^ヲを^解く^ル也^{ナリ}と^キり

^{大臣}其^ノ時^ニ帝^ハ臨^シ時^ノ節^ヲ會^スと^シ執^ス行^スひ
燕^ノ使^ヲの^系用^ヲと^シ侍^ス給^フ也^{ナリ} ^{燕陽}燕陽

荆^ノ軻^ハ大^ノ床^ノの^胡床^ヲよ^シま^シと^シし
也^{ナリ} ^{燕陽}也^{ナリ} ^{燕陽}也^{ナリ} ^{燕陽}也^{ナリ}
樊^ノ於^テ期^ヲが^以て^シ帝^ノ上^ニ後^ヲよ
使^ハ退^バ ^{大臣}帝^ハ笑^ハめ^ル氣^ヲ交^ス
也^{ナリ} ^{大臣}使^ハが^見入^ル也^{ナリ} ^{大臣}也^{ナリ} ^{大臣}也^{ナリ}
也^{ナリ} ^{大臣}也^{ナリ} ^{大臣}也^{ナリ} ^{大臣}也^{ナリ}
也^{ナリ} ^{大臣}也^{ナリ} ^{大臣}也^{ナリ} ^{大臣}也^{ナリ}

立退^ナバ^ケ 帝^{ミカド}の^ミを^シ教^シ後^ノの^ミま^ハら^ハ。
 紫^{ムラサキ}の^ミ衣^ヰの^ミ袖^{スベ}の^ミ影^{カゲ}。氷^{ヒヨウ}の^ミ如^ニく^シな^レば
 既^ス立^テ退^リ給^フん^トに^シ。日^ヒ上^ノ 荊^{トゲ}刺^スを
 於^テ一^ツ處^ニ居^ル事^ナま^ハら^ハ。法^{ホウ}衣^イの^ミ袖^{スベ}に
 む^スむ^スと^シ短^カく^シ刺^スを^シ袖^ノに^シは^シて^シあ^ハ。
 昔^{ムカシ}の^ミ女^メの^ミ名^ナは^シヨ^シ上^ノ 淺^{アサ}の^ミ也^ナ。人^{ヒト}を^シま^ハら^ハ。

ま^ハら^ハと^シ今^{イマ}に^シて^シ有^リけ^ル。
 そ^ノ也^ナあ^ら淺^{アサ}の^ミ事^{コト}也^ナ。
 今^{イマ}汝^ニ等^ノを^シ遣^ハは^シけ^ル。我^ガの^ミ人^ノの^ミ
 后^{ミコト}を^シ持^ツ中^ノに^シも^シ花^{ハナ}陽^{ヨウ}女^メと^シて
 双^{フタ}び^ニあ^ハり^給ふ^ルの^ミ上^ノま^ハら^ハ。され^バ毎^ヒ日^ニ
 皇^{ミコ}の^ミ車^{クルマ}な^シ。今^{イマ}汝^ニ等^ノが^ミ車^{クルマ}に^シよ^シ

よういしよいかの琴の音をわらう。
 下 行時の歌を待たせよ。上 琴の音を
 聞て、女泉の道をもほめらる。
 なると思ふいふ。コカ 扱奏。新陽
 何と有つたぞ。是程とよむ。めやス
 上への行程の事れられた。行時の歌を

あらせられぬ。コカ けらむ。行時の
 歌をあらせらるにさう
 いらむ。陽まゝ人。秘曲を奏。あ
 上 さらむ。秘曲を奏。さう。おより
 ぬなる。琴の音。おれらる。地。あ
 武。あらむ。程の秘曲。あ。い。ま。

玉人今うへの玉に緒琴うと秋のまよも
スレニ 玉の
日上 花の春は琴の曲を
琴の腹 花の春は琴の曲を
 も月夜よ柳花を花の夢の
 同く曲の響り月花の影乃まらむを
 秋をよと昔の秋月を井は流れる
 唐の金琴をよお川の声も流るる

露の玉もまたまよもに人への
 よもまらむ糸の個を改めよ
 君のやまもよ七尺の屏風を
 踊らば越へ川を羅敷の夜をも
 引らばなごら切れさらん謀臣か
 有るよ辞へり郡臣の聖人の取

と押込し〜と二遍の寝られを
君の御衣〜を刺柄の御衣
唯緩くと侵されて眠まらぬ也
時移る〜と秘曲度〜まなれ
刺柄のひら〜 法衣の袖を
切て屏風と踊り越〜電光の

激志るよ〜ひ愛の白玉盤ふ
庭と樹子とをさる心地して
ち極ふと惚れさせ給ひらまき
刺柄の怒りをなして 刃を帝よ
投まれば利劔が極ふと海を望
帝よと劔をたて〜 刺柄

武蔵

七

絃も秦絃絳陽をも^{ヤア}ハ裂^{ヤツ}裂^{ガキ}よ^コと^コ死^シ
 弦ひ忽ちよ失ひお^{ヤツ}を^{ガキ}海^{ウミ}其^{コノ}後^{ノチ}
 憐^{エン}丹^{タン}を^{コノ}子^コを^{コノ}も^{コノ}程^{ハジメ}あ^{コノ}く^{コノ}亡^シが^{コノ}秦^シの^{コノ}
 齊^{セイ}代^{ダイ}万^{マン}歳^{サイ}絃^{セン}保^ホち^{コノ}絃^{セン}事^{コト}時^{トキ}是^{ココ}
 后^{コノ}の^{コノ}琴^{コト}れ^{コノ}秘^ヒ曲^{キョク}の^{コノ}り^{コノ}難^{ガタ}か^{コノ}里^{サト}を^{コノ}
 例^{コト}に^{コノ}邪^ヤ

鳥追船

梗概 (所) 薩摩國

(季) 七月

薩摩の國日暮の某は訴訟の事ありて都へ上り十年を過ごしぬ留守にては
 召使の左近の承なる者主人の妻子を扶持しむけるが、田面の鳥多く下りて稻田を
 荒すに追ふ者なければ、主の子なる花若に鳥を追へといひ、さなくは母子共にこの
 家を立ち出でよと言ふにせ、母子はせん方なく連れ立ち、鳥追舟に打ち乗りて
 鞆鼓を打ち、鳴子をならし、悪世をはかみつゝ鳥を追ひてありけり。爰に日暮
 某訴訟の事終りて帰國したるが、面白く難せる鳥追舟あるにより、近づきて之を見るに其
 鳥追こそ妻子なるに驚きて近づき、召使は左近の承が罪を責め手討にすべくと怒りた
 るが我が身の不在の科と思ひ直し左近の承が罪をゆるし共に打つれて帰宅しめ
 でたく暮しけりと

鳥追船 (四番目)

役別	装束	附
シテ 日暮某ノ妻	面曲見(深井三毛) 髪 鬘帶 着付箔 色無唐織着流 扇	
子 方花	着付縫箔 長袴 扇	
後シテ 前シテ同	面前同 鬘 鬘帶 着付箔 腰巻 縫箔 腰帶 水衣 笠 扇	
後子方 前子方同	着付箔 腰巻 縫箔 腰帶 扇	
ワ キ 左近ノ丞	着付紋髪斗目 素袍上下 小刀 扇	
後ワキ 前ワキ同	前ワキ同装	
ワ キツレ	着付厚板 白大口 掛素袍 腰帶 小刀 扇 笠	

作物 舟(鞆鼓鳴子ツケ) 權禰

鳥追船

是ハ九列薩摩の丞日暮某の
 街内ふた近の丞とヤス者にくれ
 扱も頼もなまりゆ日暮某殿が所領の
 車のかひして十ヶ年に領りが在る
 にくれ生か留守よ水の心方。弦よ

花若敷を彫りかたての惣づてこの
日暮れ里とやぶら前に大川の流を
末、湖は幾多里かの湖より幾多
谷まで裏向ひの田をたきこひ種よ。
毎年ちる遊船を飾り多を遊むを
當年のちる遊むをすする者よまをい

車と歌かたての種よ。花若敷を種ひかた。
田頭のをと遊むをやとやとあは
いふ案内かた。た近のあがあつては
あらよ所がよ。はあ。あ。あ。
さんば旅人のかた。は。殿様はけ秋の
頃あがり有まこと我かたは。いふ

花若が嬉しく思ひからん ツル 只今
来る事余の候よりいせぢ存の妙く
十日言の里中へ遊より歌多のり。
裏向ひの田を吟いの殺よ。毎年
多遊あそを飾り鳥を遊あそせゆが。尚
年としの多遊あそいさいつせいる者ふをいこと

事と頼たのりては恐あうら花若を教を
庭にわが庭にわ して 何と花若ふ田の面もれ
多と遊あそとばや。花若が事へおさ幼か
くれが。右近の庭が為よ主にては
あじり。まふ田の面もれ多と遊あそいさ。
飾りふ懐かた事ことをり者ものらな

何とた近の趣が情を記者とがや。
それ人の留守とヤスハ。又十日百日。
乃至一年は母を杖に留せしと
ヤセ。刻十ヶ年に余り、杖持ヤス。
左近の趣が情を記とがや。亦詮
多き者ハお少とヤレハ。今白よりハ

いふをいふと何とてはあはし
たをの趣が情を記とがや。亦詮
こづから出でて遊うとせらにこづ
辞と思ひもあからぬ事にては。ま
いふたをの趣が情を記とがや。亦詮
ふと我らハ中とあはしとあからぬ事

はてしなく 花若く事切くて心砕
なくし程よ。毒もいで諸をよ返す
むらにては ^{コタ} 吏の巻も角もにては。
笠をとりぬれ舟屋よが産かへ唯人の
見物と社ありふれ。明日は舟を返すよ。
まよふより待たせしむらにこひ

^{ヨク} 実や花若く程果報なき者よも
何らどし ^シ ちもふ程ひくくまきぬ
春のむらと傳くうひもなく。零落
果ては ^{カシラ} 浅すや ^{ヨト} 妹が ^{オチ} 思ふ子田
^キ 連くも ^シ 遊ぶよ ^ト 糸んとて ^チ
^上 昔は ^チ 波の ^チ 流 ^チ 散 ^チ 糸 ^チ 起 ^チ ぬ ^チ 楢 ^チ 葉 ^チ の

多きを立んとて人も訪はざる某の
戸を親子付ひきまある
秋もうちからぬやよ
心ぞ嬌しき 是は九列薩摩の
日暮の何某にては。扱も某所迄の
車ひひく。十ヶ年、館の在京仕

不し所迄、悉く安堵。只今本を
發下りゆ。いふ所、誰り有るか。あなこ
あつては田舎報のまゝの聞は、何事
にぞ有ぞ。尋ねて来りゆ。実
忘れて何ら。我は是をふて、ん拙を
汝は先へ悔り。某下りたる由、

^一面^{キヨ}白^上や^キ昨^フ日^サの^サ昔^ナく^ハの^ハ昔^ハに^ハ稲^カ穂^キ
 も^キ昔^キより^ク秋^キ月^キよ^ク田^キの^キ面^キ乃^キ鳥^キ城^キ
 遊^キぶ^キと^キも^キ我^キら^キの^キ心^キづ^キた^キ事^キあ^キ。
 下^キ安^キら^キら^キぬ^キ思^キひ^キの^キ教^キ習^キ者^キの^キ鳥^キを^キ
 立^キん^キと^キて^キ身^キを^キ捨^キれ^キ舟^キよ^キ鞆^キ鼓^キを^キ打^キち
 或^キハ^キ水^キ田^キふ^キ産^キを^キ作^キり^キ又^キふ^キ舟^キよ^キ

舟^キ子^キを^キか^キけ^キ上^キに^キ連^キる^キ淺^キの^キ船^キに^キ
 浪^キ汐^キよ^ク上^キに^キ上^キり^キの^キ鳥^キも^キ業^キぐ^キらん^キ
 鳥^キも^キ数^キ々^キと^キ暮^キれ^キ世^キふ^キ我^キら^キの^キ業^キ
 我^キれ^キ現^キあ^キる^キ上^キに^キ実^キを^キる^キの^キ世^キれ^キ何^キら
 た^キと^キふ^キあ^キら^キげ^キらん^キ身^キの^キ
 泡^キ沫^キに^キ水^キも^キの^キ深^キを^キめ^キぬ^キ波^キ松^キ

お靡く秋の田代穂波に連れて深
港む面白のまの月情や頃ハ
秋毎にまき波を氷掛草に船
あぐ我らも年に一取妻の道りや
せんとなつらまを空ある頼り家
某の陸を遊ぶさる前

随分鳥を遊べて信もりや
さらにも殿は秋のころより
殆ぶたかどやせをまもりや
言は葉のこぶてはるば後とも
頼みあー只花若が果報なれそ
うたてしうりや
心奥やあ花

心あり人むなしく能合父を祈望の
習ひ水と在糸一子もたをの極
情の者ならば自が若せよ腐し
母よ思ひしを無や事よもこのらど。
衰け恨を父情お緒も束らせらん
たとい祈望しむたをの父情をふ

流かならば好浅るべし何らじ。
いひまぞかふる其目やいづつあ
をちかく袖を濡まじけれ
何事せよ歎きやぞ歎くさや何らば
我家よ取りお歎たれは後や飯の
河の鳥に悉くまぞくたをの極が田ふ

皆^レ梅^ノの^レ何^ノの^レ為^ニも^レ雇^ヤせて^レけ^レぞ
 悲^シも^レあ^レ家人^ノふ^レた^レも^レ恐^ルる^レま^レき^レば
 身^ノの^レあ^レ又^ニよ^レ白^ク露^ノの^レ して 晩^ク縮^クの^レ
 小^田も^レ刈^テ志^不に^レ又^ニ付^ク秋^ノの^レむ^レら^レま^レを
 お^少の^レ浦^ノ舟^ノ漕^ギ連^テて △ 心^ビく^レの^レ
 雑^子物^ノ △ あ^レれ^レん^レよ^レや △ 余^ホの^レ

舟^ノも^レ上^レ川^ノ報^ノ 大邊シモ 空^ノふ
 鳴^子の^レ群^雀追^テ声^ノの^レ母^ノり^レ扱^ニ
 い^レも^レ古^ノ報^ノ報^ノと^レ月^ノの^レお^レや^レ浪^ノの^レ
 花^若も^レ悲^シく^レた^レ夜^ノや^レ水^ノら^レ
 い^レた^レあ^レ時^ノら^レよ^レ カ
 夜^ノの^レ衣^ノを^レお^レせ^レ カ 夏^ノも^レら^レや

とて海と海あふよ〜あや敷きの魂
おとや恨の日に増えしごと
は 哀とたまもいふ人の涙乃
敷きひて思ひれきて我をよと海
まど海よ鳴鼓の心笛をた拍子をも
人や聞らん秘りや家を離れて

三又の月れ隈をた敷きそと侍
恨の永久ふんの雲をよと晴を
まどく殺あれ〜稲妻のやま
まどくぬ又いひつら逢坂の夕附を
別きの声は〜みろ鼓おちつれて
物よ〜おぬえよ〜まどく

ふとつらへ 報連 多の遊船は燃め入て

海に火をたきつけては、何きふ面白う

飾りたる船の火を付て、火舟うはる

に、いふのき成舟よせひや

意不思儀や アタリ 遊ぶく、東づら母を

あひやなんご、こらうまら者、我

覚へしの稱、何なる者なり

やあ、生船あせひと社 コカ 遊も漕

浮へるも遊船、こら遊付て能く

見ればや、是六日昔殿にして、お座は

徳川新法 報連 新法悉く安堵し

を稱して、御書賜り、只今下りて

改テ

報連

報連

報連

有^レぞとよ。扱^レりきたなるをたその巫^レが
 子^レに^レく^レ者^レが 子方 いや日暮^レ夜の子
 ぶ^レて^レ 名連 して^レ何^レも成^レら^レ汝^レが母^レり
 さん^レが 名連 依^レそれ^レ何^レとてか極^レよ
 残^レり^レ業^レを^レ言^レむ^レぞ 上方 父^レも
 永^レく^レ生^レる^レとて^レ又^レ喜^レば^レも^レゆ^レま^レん。
オト

輕^レみ^レる^レた^レ近^レの^レ巫^レの^レ秋^レけ^レ田^レの
 殺^レ多^レ追^レれ^レを^レば^レ親^レ子^レも^レ終^レと^レも
 我^レ屋^レの^レ住^レ居^レけ^レよ^レと^レい^レふ^レの^レ巫^レけ
 怖^レら^レふ^レを^レい^レふ^レ業^レを^レい^レふ^レ子^レの
 石^レれ^レか^レく^レ浅^レる^レ身^レと^レ成^レ果^レて^レけ
 言^レ活^レ道^レの^レ事^レを^レ言^レ者^レら^レか^レそれ
名連

名連

上

うたの子の胎内にて秘^秘たて成^成す。
 七歳まで敵^敵を討^討と^とヤス^{ヤス}に^に秘^秘た^たて^て成^成す。
 不^不敵^敵の^の兵^兵を^を有^有は^はら^らん^んか。
 汝^汝の^の目^目の^の前^前よ^よて^てを^をの^の巫^巫を^を討^討て
 捨^捨て^てら^らぶ^ぶぞ^ぞ。は^はよ^よく^くあ^あの^のや^や。

改^改テ
 いう^いふ^ふを^をの^の巫^巫を^を討^討と^とい^いふ^ふ不^不得^得成^成

者^者か。汝^汝と^とあ^あの^のと^とふ^ふ附^附を^を上^上の^の巫^巫
 煩^煩ひ^ひも^もな^なづ^づら^らん^ん。い^いづ^づれ^れの^の巫^巫を^を討^討て^てら^らぶ^ぶ。
 いら^いら^らる^る恩^恩賞^賞を^をも^もな^など^どに^にあ^あす^すの^の
 あ^あら^ら増^増の^のこ^こひ^ひも^も無^無く^く結^結り^りま^まを^を退^退下^下す。
 家^家人^人は^は使^使ふ^ふ謂^謂を^をし^し有^有ら^ら何^何と^とも^も
 物^物を^をば^ばや^やを^をぬ^ぬぞ^ぞ。乳^乳男^男の^の料^料を^をゆ^ゆら^らん^ん。

養育

四

唯久々に控おきぬる者ら父の
 科ぞとよトあまつて他家よ入と
 半日此客カクよりといとも旧里よ
 ぬりて七世の孫よ逢ふと社承りりて
 ひとよ洗んや十数年の月日
 かりくして今イマ白ハクもつらむる女メ母ハハを

見合ミアヒがハ不祥フシヨウなり 時トキ般ハツくを
 け程ケチヨの恨ウラミを我ワレらハ海ウミをの巫ハコ
 が身ミれ科シと親オヤ子コに洗ユスしおハせ
 けとト香カといイ稲イナ苺イチゴのノ小田コエちチも
 秋アキとぬヌをやヤゆユるルをヲのノ巫ハコ
 扱サツりリ後ノチよかカの人ヒトもモ家イヘを

徳田家

四

花ははきも様。若木の里に隠き
 ちたみ常正。あふらふの末に我
 久しかりをれ

松山鏡

梗概 (所) 越後國

(季) 不定

越後の國松の山に住みける女ありしが臨終に際し娘を呼び寄せ、一つの鏡を渡し
 母戀しき時は此の鏡を見るべしと言ひ遺して去れり、其の後は鏡を取り出し我が顔
 のうつれろを見ては亡き母の面影を殘せるものと思ひあたり、父は亡き妻の命日
 なれば持佛堂に入りしに、娘の何やらん取り隠くす様なれば怪みて問ひ糺せば
 鏡の事を物語りぬ、父は鏡といふ物は何にても向はんものをうつす物なる由を教へ
 けり、かゝる處に妻の靈あらはれ昔語りをなすに、冥府より俱生神あらはれ妻の亡
 靈の歸府の遅ければ冥官怒り給ふとて責め立て娑婆の罪科を鏡の面にうつし
 て見よとて鏡を示せば、娘の弔ふ功力にて妻の靈はさながら佛菩薩の如くに映り、虚
 空に花降り音楽聞えければ、俱生神驚きて忽ち大地を踏み破つて奈落の地獄
 へ歸り行きけりと。

松山鏡 (切能)

ワ	子	シテツレ	シ	役
キ 姫 ノ 父	方 姫	姫 ノ 母 ノ 靈	テ 俱 主 神	別
敷 味 布	着付、段野半目、素袍上下、掛絡、小刀	厚板着流、白水衣	面、瘦女、髪、髪束帯、着付、肘半目	装束附
	髪、髪束帯、着付箔、唐織着流		面、小癩見、色鉢巻、赤頭、唐冠、着付厚板、半切	
			法被、腰帶、打杖	

作物 鏡臺 杖

松山鏡

^{コノ鏡}
 カ板子^{コノ}者ハ。越後の守松の山家と
 ヲス知^{ソレガシ}ふ住居をる者にてハ。扱も果
 妻^メよ別れ。此日^{ソレ}ふと^ハ思ひ^ハ也。
 早^セ二年^ニに成^レて^ハ。又^ハ忘れ^レ形^ハ念^ハ
 娘^ヲを一人^チ持^テて^ハ。今^ハ成^レ人^ト仕^テ

程よ。對の屋を造り立てて。今日ハ
 彼が母の命日にと。程よ。持仏堂に
 立越へ。焼香をせよ。と思ひし。ハ
 雲となり雨とふる。陽基の月と。め
 難くも。と。ぬり。と。消へ。金谷の春
 影方も。か。月日の。乃。よ。美。ち。な。け

ま。バ。母。は。離。れて。今。年。ハ。子。院。ふ
 三。良。の。具。日。なり。 三。良。 三。良。 三。良。
 堂。の。え。を。死。き。ゆ。扱。も。れ。と。が。母。ふ
 お。れ。後。え。結。切。い。ま。も。成。け。し。を。
 一。族。だ。の。諫。め。ふ。より。今。迄。好。て。あり。
 父。が。ま。ら。ば。後。び。違。ふ。づ。た。た。の。き。く。

何とやらん物と云ひ候も、まゝなり。
徳い人の中へ候よてあり。汝も今の
母と本像よ、家して、明^{アキラ}き^{クハ}呪^{ノロ}
まるといふ候り。いふ幼き身よて。
丸極の怖しれた事と、思ひ立ならん。
室あぬなり。いふ母も、奈と落し流る。

おといも、いふ事、道に候する候よ。
さういふに、若け事人の徳言よては、も
な起事あらば、父が前にてまゝ、まよ
かゆへ。お^おた極よ、ち^ち叱^ちり^りゆ^ゆる^る候^候よ、ま^まぞ
か^かゆ^ゆで、^ま母^母らと、本像よ、う^うは^はし。
呪^呪い^いや^やと、作^作ゆ^ゆた^た母^母ら^らの^の形^形見^見の

鏡おての痛くや母の氣今を恨りの
時鏡を私心氣よさらさるかり
意一た時の言下と信ゆひし程よ
或時鏡をいれ母の面をて在り
よつち我若やあつて思へ給くた
扱^上てらん路^上さ^上ま^上〜^上流^上ひ^上そ^上ふ

きんと雨^上を^上と^上殊^上を^上せ^上給^上ひ^上き^上る。
母^上の^上慈^上悲^上ぞ^上有^上難^上き^上。 ^上不^上慮^上よ
思^上へ^上給^上れ^上た^上ら^上ん^上を^上ま^上ら^上せ^上ん^上鏡^上お
立^上寄^上給^上へ^上父^上の^上前^上〜^上 ^上是^上ハ
不^上思^上儀^上なる^上事^上を^上ヤ^上ス^上物^上を^上け^上鏡^上よ
母^上の^上氣^上の^上写^上る^上と^上ヤ^上テ^上は^上流^上は^上侍^上り^上ぬ。

松山鏡

よもた極よつやまごうをがうら漢の
武帝の后なくあらを給ひて後。
帝深く親き給ひかのおん女我
其泉殿の確きよりいし明善殿後
何れを本より繪よかける像あまき
物いもひ笑ひよどいよく親き給ふ。

武時仙人告ていもく月れ叔の隈
なうらんよ反統香を焚き給ひ。
李ま夫人のいほ女給をらぶと有るは。
友よ但せよ反統香を焼死給へば。
后のいほ女給をきこらるとありや。
我朝の聖武皇帝后光明皇后

徳れさせ給ひ一時是もち別まきを
悲し給ひ梵天より給ひに
閻王懐く給ひおれ薬のせまび
娑婆より送りし例も有り然き
まのよ代の事。是の末世の人今世よ。
た極の事れ有るはとあるは縁とも。

亡き妻も彼者より深く名残を惜
み給よ。おのれもや給へるをてらん。
まの目とやとあり。されも我。
お物ある事とや。お娘おして
母の影の鏡よ。おる事いなり。
おて有る。何とてお物あるはとや。

恨めしや河まほ後母の海カク上の波ハも
 思ひ備へぬおきのおろふと
 思ふクドキ 涙の跡の跡の跡はた
 さうとわが別れの涙もいよ
 袖に異妻をまねぬひぬまを
 恨しや思ふ後もの思ふ

吾ららんよ父を疎く
 我よらんよ乳根の親は細
 のおもひをよと細くは
 後教のつても於かたすみの
 悲しやかたより思ふりや
 のまほそ母よは後を
 我

指とさした。実をなうたれども切な
牙の心あれ〜〜〜〜〜
かゝるある
事こそいつ終極してけねの山家と
かゝる。無佛世界のまゝおまて女にれが
齒鏡と付せ。洗て笑を飾る事も
なぐれば鏡といふ物ともあつていふ。

某一年於よ上りし時鏡と一面買
とり。彼が母ふらなうとて。せよ
なまの事には悦びひかひか。今この時
彼を返付我とて。思はん時を。
け鏡をさかひのこし。せよ。鏡よ。
我鏡の写るをさかひて。母の影の鏡よ。

写るとお増て歎きいふいふ御りよ
 不使よれ程お積の謂を委あな
 ちとあゆコ改メテいふ娘。そい母の歎
 にさるるれぞ。汝が歎よてあるぞ。
 総じて積といふあよれいふも
 何れ面へ向ふ物の歎れ写る物にて

有ぞいよ是とんゆ上扇を御あせぶ
 扇の歎。父が害レ父が歎。愛を以て
 思ひ知りゆ上実と父の仲の如く。
 今、我れと女よコ改野の 岩の
 山吹風ふけ娘 産なる歎もちれだ
 散りコ改 産をばおとく歎きの
コ改

娘

顔をのぞかす

さかあつた

曰上

子ながらも是程母は似あつた

我顔あがら懐くや父の泪は

かきくれてや我を思ふにすれ

面目なほ清や子に物も似るなる

物と思はれて恋しき時清をぞと頼

曰上

性事渺茫としくはさぐり友よ

似たり旧友を思ふてなりを泉に

涙を是を氷といふんときれば

即漢女が粉をそふ清き堂たり

花といふんすれば蜀人紋を滑る綿

我もも海邊女の古郷よ立ぬらむ

瑞の穂君が為昔を信りや
 夏致驚く一途ありよ
 唐土ふ
 陳氏とて賢女の聞ありき
 世の習し思ひも
 是や恨のともありひらんか
 割きて程光りぞ残る
 二日月乃

身ふ待めて恨も文も絶
 其年月を古々の新場の秋乃
 秋更て風の使り此
 その酒はま
 のまゆも
 かこみの鏡我をとり
 涙あぐらに

就ツをレばハ月ハ出ルの場よク傾テ
 泣クなラうデ為シ方もなレ折ルはハよ
 上ツいクよリたカきリし日 鶺鴒カサノギひと河
 花ハ来リ陳チ氏シらハ肩ハ羽ハをヤまシあヤ
 とモめクつつおもいつつおよこんが
 ふクたカが有り鏡の割となりニ

上トエリの如くおなりになる皇 満ツ月ハの
 山ハをいて拍石ハ天を照スまし如くあり
 是ハや貴女ノ名を麻呂鏡成らん
 上ツいクしらに罪人片時ノ喉とそカルはるに
 今ハあのままにはらるるもももももも
 怒ヲをなり強くた俱生神を行はりて

和歌集

十一

苦患をこころせよとの仰をいふなり。

まゝ志の燃立モエ熱瘖ネツの心ココロを振スとて

ル空ソラ蟬セミのハからハ女メ婆バ女メや

留トモらん魂タマのハ冥途ミョウトよもぬけの衣の

玻ヒ璃リの鏡の御影カゲの面前オモテよもむけさげ

引ヒキ向マウけの向マウきつんを女メ婆バ女メにくの罪

科シよも年トシ働カみにあらむや形

日ヒ孝コウ子シの吊ぶ切力キリキぶよ以て

鏡カミタマシの影を放し見れば頭カウへよまさ座

膚ダヘの欠く女友コノトモ毎ツキ月ツキを居あてままを合

生ナれば心ココロならうら苦ク苦ク薩サツの座像ゾウと

清スエ空ソラよも悔クハり虚空ソラよも楽ラクいふん

見よせぬ冥途の身持すや地獄よ
 悔るぞとて大地をかたむと踏鳴し
 大地をかたむとふと破りて奈落の
 底よ我入よを家

檀 風

梗概 (所) 佐渡國

(季) 六月

大納言資朝は後醍醐天皇の旨を奉じて北條氏を亡ぼさんとしけるが遂に事成
 らずして囚はれの身となり佐渡の國に流され聽て誅せらるゝ事となれり都に残
 され一子梅若は熊野の帥の阿闍梨に伴はれて佐渡に渡り父子面會を遂げたりさ
 れど父資朝は程なく誅せられたり梅若思ふやう父を預りて之を誅したりし本間
 こそ敵なれとて其夜寢所に忍び入りて本間を討ち取り恨みを晴らしぬかくて阿
 闍梨と梅若は港まで逃げのびしが折しも船一艘港を離れたる處なれば阿闍梨は
 法力にて船を祈り戻さんとすれば三熊野の神も佛も感應ましまし忽ち風變りて
 船は岸邊に吹き寄せられしかば二人は打ち乗り順風に帆をあげ若狭の國へと無
 事に着きそのまゝ都へと帰りしとぞ。

檀風 (四五番目)

役別	装束	附
前シテ 大納言安朝	着竹厚板 白大口 腰帶	掛絡 數珠 扇
後シテ 熊野権現	面不動(小瘡三) 赤頭 色鉢巻 輪冠	着竹厚板 注被 半切
子方 梅若	着竹厚板 白大口 腰帶	小刀 扇
ワキ 阿闍梨	兜巾 藤懸 着竹厚板 白大口 水衣 腰帶	小刀 數珠 扇
ワキツレ 本間三郎	梨子打鳥帽子 白鉢巻	着竹厚板 込大口 直垂上下 小刀 扇
後同 船頭	着竹無地耐安半目 素袍上下	小刀 扇
前同 典早二人	着竹厚板 白大口 腰帶	扇

作物 權棒

檀風

^{本間}
 是は依渡の玉はが家人本間の何某
 にて、切もい度え弘の戦よ。公家
 打負給ひ。日野大夫納言安朝の今へ
 因人と成りて、流され給ひしを。
 東朝りかたて、此日鎌倉より北御

立って大車オホクルマの因ユヅ人ヒトなれば。あまぎ保タマキ
 かせと作ツクリがされて。いゆ残ノコやとこ
 たやとなひ。又用心ウチココロの事コトと申マシ付ケひ
 奄アム親ミヤの行ユク方カタと尋タシね給タマふ
 越コ渡ワタの旅ツリを遣ツクけま。是コノ六ムツ
 都ツ末マツ山ヤマ今イマ慈ニ聖シ柳ヤナギの本ノ坊ボウ小コ牌パイの

の闇ヤミ梨リと申マシ客キヤク傍ホウにシて。是コノ小コ渡ワタひ
 幼コき人ヒトへ。日ヒ野ノ大オホ納ノウを。浪ナミ負ウ朝アサの心ココロの
 ぶ子コ息イ。梅ウメ若ワカ敷シと申マシ人ヒトふて。お産ウマひが。
 父チチお今イマ度タビえ。弘ヒロの乱ランよ。生ナマ捕ツとなり。
 依ヨ渡ワタの因ユヅよ。お産ウマひ由ユ謝シヤし。召メカ及ツキづれ。
 今イマ一ヒト度タビ父チチおふ。対タイ面メン有ア度タビ由ユ保タマキらま。

我等を頼とせらるるは、
伏波の海人ともいふに、
於此に空のまをさうりし
越の海今を始めてあらまら敷が美の
津より船がきて、浪高きらの縁衣
浦に流れきなりて、
船を沖ふも、

とも伏波の海人も、
名は程よそいそや、
志者よてい、
本間とや、
さるにて、
何れは渡りゆぞ、

龍船

終

是の何の為よはひなりゆぞ コト 未だ

是の部東山今慈母榎の本れ坊ふ
師の阿闍梨と申客傍にまゝゆま
是小渡りゆの賀賀朝の郷のぶ子息。
梅若殿と申人ふて入ゆ賀賀朝の
困人となり給ひいふふをなある由

本回

聞一且れ今一度父ぶよはひ賀賀朝
由作られ我らと申頼まゆらる。ま
此供やてゆ。本間殿の心も清を以て
賀賀朝の心引合せやとされて給なり
遠くまをこゆ下り神妙よ存れ。扱
賀賀朝の心はぶ子息にまゝ座なり。

下
先キハふカス如く惣ヨづいて因人の不縁ユカふ。
對面の儘カく禁制キされてゆた。切キき人
の邊ヘで是コトをシつりの事コトにては程ハふ。
寶朝タカラの心ココロ其由披ヒ後ノチやさうシを
にては。新ニまマよシ結ムスゆハ心ココロはハてハ
上ウヘにニ結ムスむム重オモシとシ意イ佛ブツ屋ヤ友トモとシ夫ウレふハ心ココロ。

史シの類ルイふハそノやハ人ヒトがハ於オて
我ワれノ物モノ思オモふハものハよシにニ實マコトや
科シなハうハてテ死シの月ツキをシんハ事コトハ
古人コノヒトの望ノゾミ所トコロあれハ任マカるハまハた
世ヨの中にニ明アキラき物モノをシんハよシ
天アメ晴ハらハ珠たませハらハれハるハやハしハふ

體記

水

一、^本輕とゆゑ急起が對面なり ^一何と
 脚の阿闍梨と申す客僧の言を待ひ
 某に對面去る起てりたるをゆや
^本申すの事 ^一是の思ひも某らぬ
 事と承りぬ物か。極して某の子を
 持とぬ者にてい ^本何と某子の持と

斗ぬと仰ゆが。先物の條よりそと
 ぶ流ゆつけれ成者にてい。某らぬや。
 此子とば持てきぬよ。承りぬが何とて
 ぶ為後れぞ ^一其事にてい。彼らも
 某が如く流人と成るゆを。能くを
 中遠く是を束りてらる。相為後

仕りては。まき遊がすて。流りゆ。
 心持申ては。室の前の室の傍の渡り
 是にハ。作の海りを。改貝朝のゆふ
 かにては。楳どて。あ子。越が持て。れぬ
 よ。信ハ。何と。く。左。様。子。卒。忽。た。る
 事。と。ハ。漸。り。ゆ。ぞ。何と。改。貝。朝。の。ゆふ

が。披。露。ゆ。ぶ。物。と。て。あ。子。と。ハ。持。て。き
 ぬ。と。ハ。や。申。の。事。な。よ。が。案
 者。と。も。が。流。り。ゆ。あ。子。に。て。も。あ。た。人。の。
 遠。で。是。と。下。り。流。り。ゆ。ま。ら。遠。く。ま。が
 ち。如。く。が。披。露。ゆ。ゆ。や。り。と。う。た。極。よ。ハ
 伴。り。き。扱。い。甘。某。が。不。慮。な。る。と

ぢや其上物の條よりが後ひひく。
 此子にてゐる由傳られけ。後が
 日暮す海ぶひよてなふシラトいりに
 梅若殿は今の迄ぶよとこのとら沙汰
 けじき子方上コ悲カやまの遠ネき身ネりたる。
 かしも諸ナのう川勢貝をせぬ恨ミを

いかんせんコト上コ我カも意カ〜コトあつた
 冥朝ミヤウチは見度ミタの思オモひを我カ子コと名ナを
 歎ナとしてシテ若ニも命イや失クなをれんと
 思オモひ他人タニといイはるコト中ナカにたみふ
 心ココロがきコト一ヒト世セと氣キくコトけ世セ我カだお
 添ソひも早ハヤいコト親オヤ子コの中ナカにシテあ

い。え。ん。後。の。世。れ。 おん 契。つ。も。い。そ。が。
 事。も。な。く。や。後。の。世。に。あり。
 女。ふ。え。ぬ。親。と。子。れ。補。て。の。お。も。え。履。
 立。深。ひ。な。ら。ら。も。実。を。逢。ぬ。事。ぞ。
 悲。し。現。 おん 事。も。な。く。や。後。の。世。に。あり。
 悼。む。か。が。ら。か。な。く。武。士。樂。よ。

糸。せ。ち。淡。れ。う。の。野。よ。さ。ぎ。い。たり。
 兼。て。怨。た。ら。事。か。れ。惜。き。命。に。
 何。ら。終。と。も。さ。すが。実。朝。の。名。あ。ま。き。ば。
 心。凄。き。ま。り。た。か。 おん 梅。若。父。の。
 ぶ。実。朝。と。聞。より。目。く。れ。肝。消。え。
 起。ゆ。ま。り。び。つ。泣。く。お。楽。の。路。よ。付。て。

^{同上}西へ向ひしを念をキ南無
 阿彌陀佛と云ふ留アハ給ふ無教
 此首の氣よ病ふをり

^{本写}いふ客傷ふ中は近はる起り
 此下りししてから教を起辨をいふ
 是れよコ生事にしては

獲り教な起事をとん中して一入
 為後侍りては起骸をば客傷
 賜はるキ給ふ供養中たらは
^{本写}安き程のちより怒よ供養中へ
 又次貝朝の人の遺法にとも程ふ
 ねて起り送り中へ一は易く

抄尾

11

思へ置れや コカ 頼も存や

本写
いふ甘菜の肉の者たを タシカ 信ふや。け程の
尚番は ウタ 草 ウタ 外 ウタ 入て ウタ 易く
夜を ウタ 信ふ ウタ 信ふ ウタ 信ふ ウタ 信ふ
コカ 何事にして コカ 何事して コカ 何事して コカ 何事して

本るを討たやと思ひ コカ 替。
是ハ コカ 獅 コカ 亦 コカ なる コカ 事 コカ を コカ 信 コカ の コカ 物 コカ 耶。
此 コカ 牙 コカ の コカ 親 コカ の コカ 敵 コカ の コカ お コカ 捕 コカ 守 コカ 守 コカ 守 コカ 守 コカ 守 コカ 守
フ コカ 我 コカ の コカ 本 コカ 本 コカ 本 コカ 本 コカ 本 コカ 本 コカ 本 コカ 本 コカ 本
力 コカ 力 コカ 力 コカ 力 コカ 力 コカ 力 コカ 力 コカ 力 コカ 力 コカ 力 コカ 力
島 コカ 島 コカ 島 コカ 島 コカ 島 コカ 島 コカ 島 コカ 島 コカ 島 コカ 島 コカ 島

正沙汰りもきんも思ふはしきり人
子方いや目の前にて父を討たるとそ
 敵あれ。然カス命失るを討でいつし
 何と然カス命失るを
子方討でいつしとひとや 中
 の事 コト 日お一健タカなる人ひて

先込ム後物家。いりつる物て討てまら
 せど一。唯今本るが中法る酒の
 者だといけ程の當番も草ぬらん。
 皆我全よ海き本るも外取
 今心易く休まらざるも中てゆる。
 討ぎい夜一。日お一の夜にそくゆ。

ぶ本居にいてはるの刀をば梅若子
 ぶれゆく其後け客傷よせせ申。
 けまへ渡りゆへ河ら笑止やいよま
 寤屋の火が消へぬま何の為ふら
 夏虫け身を焦まぶき火をまんと
 明け障子に花付たりツカ 今ツカ 我

消ぶき使りのなきこと障子を細めふ
 明けられけ 虫ツカ 悦び内ふ入り
 是ツカ 火を む川と 消ツカ たるステル
同上 灯火カルク せに敵の命今そ消てら
 げれツカ 心ツカ そふ福らしひあり
日 守りツカ がを扱持てなるあ

三郎が狗の何にに急ぎつゝに
 刺をく撮をぶおりあをんれん
 追まの声にあふくと追急る
 け方渡りゆ。まの浦よあて船を
 軽やうするにこゆ 船 け程月を待
 けあよ。日おの追月が吹来とくゆ。

船をあげて コ されがそこの事
 出船のけ便船をとん コ あれ成
 ふ船よ便船やまう 船 け船よ便船
 とゆや。心後ゆ。既持を立帆を引
 たる船よしてゆ。いまこがぬ船よ信ゆ
 け方 コ 船よ自中してゆ。け我。是ハ

遊ユウのわが里サト難ナニ依ヨふ及キぶ者モノふては。
 形カタに系ケイせて賜タマひりし。
 老ラウ極キョクの科カ人ジンあらば、程ハジけ船フネよ、
 浦ウラトコよク科カ人ジンかけ客キヤク僧ソウよク。
 科カ人ジンが繫ケイせはとも、いイ見ミ独ドク系ケイをオ人ニ。
 也ヤ思シも法ホウ師シも知チぬとて、程ハジけ船フネを

押オシて給タマひコ。 誠マコトに船フネあせど、悔クハあ
 事コトが有アらむとるぞ。 何ナニの悔クハく
 何ナニもどたぞ。船フネ棹サウもふも忘ワスレる。 風カゼふ
 でぶ程ハジの習ナラひあり。 さしては、風カゼハ
 ちまねる。 向ムカうて西ニシふ為タメさうぞ。
 えい。 あらむとるぞ。 何ナニの悔クハく。

と船家をもていねいせうとせうと

^船いといねい船家をもていねいせうとせうとや

^{コ見}申この事 ^船いねい 志お思候や山伏の

物の怪など我折ると我ゆけ船

新川たるは海らうら ^{コ見}滅生船

芳せずして悔む男 ^{ステル} 同上 ^{タイレイ} 山伏の

志を清くし ^{シテリヤ} 年功の功を積事

一子余と日志むく ^{ステル} 身命を捨

態世権現ふれ ^{シルシ} 我思ひなとら 疾の

かろき ^{コシ} 一粉蜀 ^ガ 舞 ^ラ 二制 ^{太コサセ} 多 ^イ 依 ^タ 二 ^カ 子

俱利伽羅七丈八丈 ^カ 合別 ^カ 童子

^{コ見} 東方 ^{早留} 日 ^上 柞我朝 ^ス 並 ^ス 神 ^イ 跡 ^カ を

雲れ^ハ結^ヒひ^キくして威光も神徳も
ま^ハら^ハく^ハ成^ルと^ハ中^ニせ^テを^ハ慈^ノ野^ノの^ノ権^ノ現^ノ
の^ノ誓^ヒひ^ノぞ^ハ務^レたり^キも^ハス^キキ^キあ^ハら^ハぬ^キ
大^ニち^ニれ^ハ風^ノを^ハ西^ニ吹^ク風^ノと^ハ成^ル事^ハ
し^ラなる^ハ留^ルあ^ラる^ハ後^ニ 本^ノ宮^ノ隆^ニ城^ノ殿^ノ
何^レ孫^ノ院^ノ如^レ來^ノの^ノ誓^ヒひ^ノよ^ク西^ニ吹^ク風^ノと

な^ク結^ヒひ^テ船^トを^ハあ^ハら^ハぬ^キ又^ハ
雲^ノの^ノ風^ノも^ハ西^ニ吹^ク風^ノとな^ル事^ハ
新^ノ宮^ノ薬^ノ師^ノ如^レ來^ノの^ノ淨^ノ瑠^ノ璃^ノ淨^ノ土^ノ
東^ニに^テあ^ラち^ニ吹^ク風^ノとな^リ結^ハふ^ハ 又^ハ
飛^ル龍^ノ権^ノ現^ノの^ノ浪^ノ濤^ノを^ハ舟^ノ向^クを^ハ
浪^ノ本^ノに^テあ^ラち^ニ親^クを^ハ 二^ノ十^ノ八^ノ部^ノ衆^ノの^ノ

四ノ

二ノ

かせ後船を早めたり日上 扱ふは
 救ふハナリ 不動明王マの日上 索の繩を
 船に付て美津の浪波を折時程よ
 若狭の浦よ引付てまより怒ふ海
 浪も実者強た三熊野の誓ひの
 まく社有り難けれ

谷 行

梗概

(所) 前京 後葛城山

(季) 十月

今熊野の山伏に松若といふ一人の幼き弟子あり未だ稚きにより母の許に置か
 れたり山伏修行のため峰入りする例ありしがその峰入の時来りければ松若が家
 に暇乞に出かけたり此時母病臥に在りければ松若これを案じ母の病平癒を祈ら
 んため峰入の人数に加へ給へと師の山伏に頼みて共に葛城山に入りけり旅馴れ
 め松若途中にて病を得て大事に至りしかばかゝる場合谷に捨つべき山伏道の
 法によりて松若を谷行に行ひたりされど師匠の歎きに山伏達も松若を憐に思ひ
 各力を合せて祈りけるにその法力通じて後の行者現礼伎樂鬼神をよびて松若の
 坑屍を拾はせ遂に松若を蘇生せしめ元の如く山伏の手に返しけりと。

谷行 (四五番目)

役別	装束	附
前シテ	松若、母	面曲見(深井之) 髪髪 髪帯 着竹箔 色無唐織着流
後シテ	役衆鬼神	面志々み 赤頭 色鉢巻 着竹厚板 半切 注被 腰帯 斧 扇
子方	松 若	着竹箔 長袴 扇
後子方	前子方同	兜巾 篠懸 着竹箔 白大口 水衣 腰帯(三) 小刀 数珠 扇
後ツレ	役、行者	面悪尉 唐帽子 白垂 着竹厚板 半切 狩衣 腰帯 錫杖
ワキ	山 伏	沙門帽子 着竹小格子 着流シ 水衣 腰帯 小刀 数珠 扇
後ワキ	前ワキ同	兜巾 篠懸 着竹大格子 白大口 水衣 小刀 腰帯 数珠 扇
ワキツレ	先 遣	山伏姿
同	山伏五人七人	ワキツレ同装

作物 臺(本青、木二本立口傳)

谷行

是^{コト}ハ^カ今^ノ態^ノ聖^ノの^客僧^ノ来^ルハ^ハツレ
 此^ノ度^ニ思^ヒ立^チ入^レ仕^ルヤ^カツレ^ノ推^スキ
 カ^ノ子^ヲ一^人持^テ行^ク父^ノハ^後を^母
 一人^ノ流^シて^行ク^ノ後^ハ小^ノ後^ハ小^ノ程^ハ不^レ
 立^テ越^ス彼^ノ者^ヲ小^ノ喉^ヲと^セと^成ル

いふは内業内業まご 誰にて

入るぞ。全。原匠のあがふく

何とては間寺まごのあ見へたぬぞ

さんが母の凡の心地よまご入る程よ。

扱来らばまご 何と母の凡乃

心地よ入るとや。某が来りたる由

あがまご 心持たてふいふや。

原匠のあがにてまご けあまごとやせ

こあまごのあ入まご 心方りの由まご今

松若教作らまきゆをそ承りては

凡の心地の何とあ入るぞ。又あ入る

仕程よ。あどの為よ来りては

何と家入と云や。異おる大なる此の行
 と我の承りてゆく。相松若とも世に
 さん。我若ら家入と申す。難行
 捨身の行もて。切き人の世を
 する道にゆく。おかく。して。さうを
 ねて。下向く。ね。まらうする

にて。子方。いふ。師匠。ふ。た。の
 何事にしてゆぞ。子方。松若も家入の
 世に。い。今も母の世に。て
 かく。切き人の世を。する。道に。い
 なく。その上。母も。月の心地。い。入
 程。さ。思ひ。いと。あ。ら。ぬ。事。に。い

^{子方}母心の月の心地よしの入心は我の祈りの
 為さしてう極よ申れ^{コト} 扱心の祈りの
 為とゆや。はらばきまで母おふ申れべし。
^{改ノテ}又まうてい^{コト} 何とてお悔りゆぞ
^{コト}松若殿の炭入の供やうきさる由仰れ。
 只今も申れ如く。切き人の供やうする

乃にていなくゆ。せんは度い止めゆ
^{コト}せん松若殿申れ如く。師匠の供や
 寄入せん我をまむおあれた。
^{ヨト}お方の父よれくま^{コト}一日よりた
 独り子の一向ふ杖柱を頼む親の
 身は流ふ時だよんぬ^{ヒタスシ}悔い^{コト}縁^{コト}程

だもも心からまじく思ひを言ひ申す
只々たのしみありや カハル
下 仰る事
心算にてゆかむとめては身よ
そへ身ハ程々の道よ出て母の現世
を彩らんと思ひまじく申しありと
かきくど現法をせん身よあし原匠も
日ト

母も諸事をしつゝ ニ 何れも孝行の徳もや
涙成らん ホシギキ
上 けよなれば力なく
さしらば原匠のお供して寝るゆり
給や ヤ
子
上
族 悔るまのむとと老そ
がる日も暮れてまじくやましく
大和路をた思ひま と おりひ残

大和路

残

そなたの向ふは 流るるの神も切ら
じきふ 別れの極みの跡末なきバ
よそこのこゝんてや 中なるん葛城や
高瀬の山乃峯の雲晴れぬの状の
思ひふれ名残惜さをいふをん
く 中入アレイ上 新て松若思ひは卯

巖入の姿山伏の 兜巾の縁
昔は衣 上 今思ひま道聖の
く 使への深き志し 唯孝の
神がよ馬もこのまを徒歩とけく
こはあが為ら守治の山都がらふ
みりの原泉川の風をこふらふ

声々々々の夕づかき
ぬりさひんれは春日なる
三笠の山を指さして布敷れ神杉
るびつてふ痛の山むよそにんき
たれ我屋を定めきんまはる乃
昔衣行あそむる着城のあはれ

宿りなりけき
着城一の室よそでけ今夜は不に
遠あせらざるにてふ
いふ師匠よかたりの何事
にてかぞ道より風の心地ふく
暫く松のたふくかたの事にてふ

夫ハ唯習ヲメテ旅ノ疲キニ付テハ程ヨ
苦クハラズバ小先達 いろふ先達セシダチナリ。
松若殿月此心地ニ承リテハ何ト
也ツク 痛クモ いろふ先達セシダチナリ。
是ハ時習ハメテ旅ノ疲キニ付テハ程ヨ。
月ノ心地ニ付テハ何小先達ト 扱ハ目カ

度ツク。いろふ先達セシダチナリ。何小先達ト 扱ハ目カ
松若殿月ノ心地ノヨシト仰ル程ヨ。
先達セシダチニ尋ナレテハいろふ先達セシダチナリ。
仰ルニ付テハいろふ先達セシダチナリ。
見ハメテ旅ツクハ大法オホノチニ付テハ程ヨ。
仰ルニ付テハいろふ先達セシダチナリ。
いろふ先達セシダチナリ。

いろふ先達

いろふ先達

大法の徳を。谷行の徳ありあれと
 先なき^{小先なき}心^心に。はらばし由を
 かく^ナいふ先なき^ナ心^心に。只今の昔
 からぬよ^ナく^ナ仰^ナれ^ナ。コト申せば存命
 不定よ^ナん^ナせ^ナ。終^ナひ^ナく^ナ痛^ナく
 か^ナぐ^ナら^ナ。大法の徳を^ト。谷行の徳あり

ゆ^ナと^ナ各^ナに^ナ事^ナにて^ナ。各^ナ仰^ナられ
 事^ナを^ナに^ナく^ナ。將^ナに^ナ待^ナれ^ナ。谷行の
 子細を^ナ松^ナ若^ナ子^ナ。熟^ナに^ナ中^ナに^ナ。さ^ナう^ナする
 に^ナて^ナ。い^ナふ^ナ松^ナ若^ナ子^ナ。は^ナ聞^ナけ^ナ。道^ナは^ナ出
 う^ナ様^ナ。病^ナを^ナす^ナる^ナ者^ナを^ナ。谷行とて
 谷^ナの^ナ谷^ナを^ナ。入^ナ。忽^ナ命^ナを^ナ失^ナふ^ナ事^ナ。

是昔よりの大法あり命の終る
物あらば己身の為に捨ん身の有り
命の惜うらん也もぐ進退窮り
て外こせ、子方 仰い立ち事にてゆたども。
けりよあて命を捨ん子思ひの終の
んあまきむといひは物事ハ母の

心歎きの又ま我深地悲うとなれ。
又仮初も地生の縁皆心各殊うそ
惜らゆ一何といひやる方もなく。
皆声をもの涙不咽ぶ心を悲しき
新て面も一固小表悲う地世の習ひ。
殊又是ハ大法の真見私なき候よ。
マヤウケン

心

下

心

下

谷^ニ乃^ニよ^ニ我^ニを^ニ引^ニひ^ニた^ニま^ニき^ニ ステル ヨ上 先^ニ達^ニも
昨^ニ身^ニの^ニ契^ニり^ニの^ニ申^ニな^ニれ^ニば^ニ何^ニと^ニい^ニや^ニる
方^ニも^ニな^ニく ミカ 唯^ニく^ニれ^ニと ツカ 目^ニも
あ^ニや^ニあ^ニく ヨ上 泣^ニ洞^ニせ^ニれ^ニぬ^ニる^ニあ^ニま^ニき^ニば
身^ニも^ニ痛^ニた^ニふ^ニと^ニも^ニか^ニく^ニも^ニな^ニら^ニず^ニや^ニと
思^ニふ^ニも^ニく^ニあ^ニた^ニぬ^ニ事^ニぞ^ニか^ニあ^ニく^ニ現^ニ

悲^ニし^ニの^ニあり^ニて^ニ少^ニき^ニの^ニ生^ニ別^ニ離^ニの
心^ニなり^ニ申^ニし^ニ別^ニあ^ニら^ニば^ニ程^ニの^ニ歎^ニき^ニ
よ^ニも^ニの^ニし^ニ ホクセ シダ 一^ニ切^ニ有^ニ為^ニの^ニ世^ニれ^ニ智^ニひ^ニ
如^ニ愛^ニ下^ニ チ タ 如^ニ落^ニ亦^ニ如^ニ電^ニ ニト リ 慈^ニ化^ニ
如^ニ是^ニ鏡^ニの^ニ心^ニも^ニも^ニれ^ニも^ニひ^ニも^ニら^ニど^ニや
け^ニも^ニこ^ニの^ニ行^ニ者^ニは^ニ道^ニに^ニあ^ニか^ニあ^ニら^ニ

今

十

火宅の門を去り給て程安うらぬ之宴
の親子懸世の歎だウニ等シかりシり
小先達ツ上 郵ハて時刻も移りハてハ 皆ハ南ハよ
思ハひ切ハルハ邪身ハの劔ハ牙ハを碎ハくハ心ハを
なハして彼人ハを嘆ハきハ谷ハよ落ハし入ハ。
上ハよ復ハや石尾雨ハ泥ハを動ハうハやるハ

心ハと痛ハめ声ハをあげ皆ハ先ハんハふ
泣ハけハるハりハ 小先達 やハまハ夜ハがハ明ハ
てハいハふハ先ハをハまハ中ハのハ救ハがハ明ハくハいハ
急ハらハ立ハゆハ 小先達 各ハいハふハ立ハゆハ我ハらハの
能ハらハまハいハくハいハ 小先達 是ハいハふハ急ハふハてハゆハだ。
先達ハのハちハ立ハなハくハてハいハ何ハとハえハ解ハのハ山ハ伏ハ

144

145

一新いの川と松若殿を再び復生
 させらば何事と成りトモエトナリ 是を
 乞ひては由先を建しやからずしては
 いうふ先をまよふ中は年月の経たも
 か極の爲にして社へ祈りた新有て
 松若殿を二つび復生させらば

何事と成りトモエトナリ 此極の
 事社聞後かうとて山の山神
 護法を神并に不動明王の素にサツク
 乞ひて松若殿を二つび復生させら
 ば是らにさうは皆々力成縁へて賜り
 けり小先達 祈りツキ上 極も師匠にそあ

歎き^{コト}げ^ルつら^き者^ノ極^ニと^見え^タも^同じ
 心^コろ^カ ざ^らに^キ年^シ月^{ツキ}た^のて^成
 か^かる^も身^ミハ^不動^ブ明^{メイ}王^ノの^威力^{リキ}
 又^マ山^{ヤマ}神^{カミ}後^ノ法^{ホウ}音^{オン}神^{カミ} 殊^ニ山^{ヤマ}
 役^役の^優後^ノ寒^{サムイ}
 長^{チカ}慈^{ニギハヤヒ}納^{ノケ}受^{ウケ}
 番^{ツバ}生^{ナマ}法^{ホウ}の^上使^{ツカサシ}者^ノの^心神^{カミ}乃^ニ

妓^ギ樂^{ガク}妓^ギ女^メを^遣は^して^助け^おさ^しませ
 救^クえ^ん蓮^{レン}花^カの^山路^ジ途^ツへ^とま^り
 風^{カゼ}生^ナま^す毒^{ドク}の^冥闇^{ヤミ}を^照ら^し積^{ツク}功^{コウ}
 累^ル徒^トの^床上^ノよ^しま^に如^ニの^月や^ぐら^り
 に^いて^おも^らぬ^隈も^ある^海じ^や
 寂^シ寞^{バツ}無^ク人^ニ声^ノ 讀^{ヨミ}誦^スは^経典^ノ我^ガ尔^ニ

上

下

時為現清淨光の身ハコトしふ面々
 怪ふミヤシ夢ケかの小童コタラシ他タよ異イなるる
 親孝ヲ以テの人トシ辨ハあれハ忽ニ命ヲを授ケる
 なりハ乞ヒ易クれ人トよク荒ク有リ將シの
 事ヲ也ト扱ルが極ニはハ返シ延ビふハいハ成
 行キ者ヲよクおハまシほシらんト 仍モ若クとシてハ社

於テそれヲよク年ヲふシ増シりキを聞く
 賢ク辨ハひテいハるト 志ヲありト由キ ラウタカ
同上 葛城山ノの名も言ひテ役ノの事はそく
 目ノ下リ来リ現レも孝行ヲ由キ荒ク有リ縁ノ
 心ヲ悲シむト也ト 志ヲよりシ生ル一ノ子ニてモ
 衰ハ敗ハあれハ親ハ佛ノ志ヲ也

孝行切あるチヨウんを感カまるとして
 則ナち近チカふと賜タマひ帰キらせ給たまへむ
 スム
 妓キ樂ガクもたふ清キヨ先マキを拂ハラて候マし
 道ミチを分ワけ川カハつ上ノりやうノ間の
 志シを方カタはとふや葛カ城シロの人ノ目メは社ヤ
 からされども俄トに渡ワせら岩イ橋ハシを

大オ岩イうウけてケたまマらラぐと大オ岩イなナりリて
 遠トくとト虚ウ空ウを渡ワつツて矢ヤよヨけケり

昭和五年八月五日印刷
昭和五年八月十日發行

著者權所
復製不許

昭和
改本
版

訂正著者

廿三世

金剛右

京金剛

發行所兼

檜常之助

發行所

合資會社 檜書

檜書店

東京市神田區錦町二丁目拾番地
京都市三條通麩屋町東北角

檜書店京都出張所

終

